

機関番号：12604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720071

研究課題名（和文）メルヴィルのオリエンタリズム—極東／南島を中心として

研究課題名（英文）Melville's Orientalism: His Views on the Far East and Southern Isles

研究代表者

斎木 郁乃（SAIKI IKUNO）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：90294355

研究成果の概要（和文）：ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の作品中に直接的または比喩的に言及される極東及び南島の地理的・政治的・歴史的・美学的意味を検証し、メルヴィルが同時代のアメリカ社会が内包するオリエンタリズムのレトリックをいかに利用しかつ転覆しているかを明らかにした。19世紀アメリカにおいて、『東洋』とはすなわち近東であるとする学術的認識を、極東にまで拡大し、その新しい歴史的枠組みの中でメルヴィル作品を再解釈した。

研究成果の概要（英文）：I have researched geographical, political, historical and aesthetical meanings of the Far East and Southern Islands mentioned directly or alluded figuratively in Herman Melville's literary works, and have clarified how Melville takes advantage of and at the same time subverts the cultural and social rhetoric of Orientalism in nineteenth-century America. Though "the Orient" in the nineteenth century had been academically considered to signify the Near East, I have expanded the definition of the Orient to include the Far East, and have reinterpreted some works of Melville's in this new historical frame of reference.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総 計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：アメリカ文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学・米文学

キーワード：アメリカ文学、オリエンタリズム、ハーマン・メルヴィル

1. 研究開始当初の背景

ハーマン・メルヴィルの作品に現れるオリエンタリズムについては、「オリエンタル」の範囲を近東(Near East)またはイスラム教文化圏に絞った、優れた研究が数多くなされてきた。ドロシー・フィンケルスタイン(Dorothee Metlitsky Finkelstein)は、*Melville's Orienda* (1961)において、メルヴィルの東洋への関心は、ポリネシアだけでは

なく、近東にも向けられていたとし、メルヴィルがその作品の中で、イスラム教的東洋の歴史、信条、そして神話をどのように解釈して用いたかを、メルヴィルが利用した書誌、メルヴィルの近東への旅、また同時代のアメリカ人のオリエンタリズムを丁寧に検証して論じた。ジョン・アーウィン(John T. Irwin)は、*American Hieroglyphics* (1980)の中で、ロゼッタストーンの見解に続くエジプトの

象形文字解説がアメリカン・ルネッサンスの作家たちに与えた影響と、その結果生じた言語観の変化を鋭く指摘した。ヒルトン・обенジンガー (Hilton Obenzinger) は、*American Palestine* (1999)において、19世紀にアメリカの国家作りを、神に選ばれた民による「新しいイスラエル」建設と見なす思想の中で、多くの作家、芸術家、学者、観光客が実際にパレスチナを訪れる、一種の「聖地マニア」と化したことに着目し、メルヴィルの長編詩『クラレル』を神とイスラエル人(アメリカ人)との約束の失敗を確認する巡礼と見なした。このような近東についての研究の厚さは、19世紀から現在に至るまでのアメリカと中近東(のオイルマネー)との切っても切れない関係性を反映しているともいえる。

一方、メルヴィルと極東の関わりを論じた本はなく、論文も数少ない。その原因の一つはもちろんメルヴィル作品中に極東(又は仏教・儒教文化圏)が直接的に言及されることが(少なくとも中近東に比べて)少ないこと、そしてもう一つの原因は、アメリカにおける極東への関心が高まったのは、「金ぴか時代の疎外された若きニューイングランド人たちが、仏教に精神的安定を求めた」19世紀の終わりであると学術的に考えられてきたことである。しかしながら、極東への関心は19世紀の終わりに突然始まったはずはないし、チャールズ・オルソン(Charles Olson)がメルヴィルを“a Pacific man”と呼んだように、船乗りとしてハワイ、タヒチ、ポリネシアといった太平洋文化圏に直接触れる機会もあったコスモポリタンメルヴィルが、西漸運動が太平洋岸に達した後、アメリカ帝国主義の次のターゲットであるはずの極東にいち早く注目していたことは想像に難くない。

上記の認識に基づいて、*Moby-Dick* で言及される『二重に門のかかった国、日本』に着目し、二本の論文を書いた。“Strike through the Unreasoning Masks: *Moby-Dick* and Japan”においては、理屈で説明のつかない仮面としての白鯨を執拗に追い求めるエイハブの狂気を、閉ざされた国、日本の謎を解き太平洋を征服しようとするアメリカの帝国主義になぞらえ、日本開国直前の政治的・外交的な緊張状態が、ニューイングランドの捕鯨業と、エイハブ対白鯨の戦いに及ぼした影響を論じた。“A Shadow of the Far East: Feddallah; or a Japanese Sea-Drifter”では、「吹き飛ばされた日本の船」に乗って漂う「奇妙な漂流者」に触れたメルヴィルが、中浜万次郎をはじめとする、アメリカの捕鯨船に救助された日本人漂流者について知っていたと仮定し、フェダラーをはじめとするエイハブの秘密の乗組員たちが日本人である可能性を論じた。本研究は、これらの『白鯨』論を出発点として、メルヴィル作品と同時代

のオリエンタリズムの接点を探るものとして開始された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、メルヴィルのオリエンタリズムの特異性が、西洋の拡張主義のターゲットである歴史的現実としてのアジアと、西洋の男性性に対する女性性、または現存する人類の起源(ユートピア)を表象する象徴的記号としてのアジアの共犯関係を、複雑なレトリックの中に暴露していることであることを明らかにすることである。

まず、19世紀初頭から19世紀末までのアメリカ及びイギリスにおける、極東及び南島に関する言説を当時の文献から掘り起こし、その政治的、歴史的、象徴的意味について考察し、中近東にとどまらない、極東も含めた『オリエンタリズム』を定義し直す。次に、メルヴィルが作品中で言及する極東及び南島に関する記述を、上記の同時代の言説と丹念に比較し、その接点及び分岐点を探る。特に次の三点に重点を置いて論じる。一つ目は、同時代の超越主義者たちが、東洋を西洋的遺産の偉大さを強調するための道具として用いたのに対し、メルヴィルが時に東洋の負のイメージが反転して西洋の現実となることを示していた点で、同時代人のオリエンタリズムとは一線を画していたことである。メルヴィルの正確で冷静な歴史認識は、例えば中国が植民地化の対象としてのみならず、西洋の植民地主義を模倣する未来の脅威の国として捉えられているように(『クラレル』4章21節)、安易な東洋の象徴化を阻んでいる。二つ目は、上記のように西洋の一方的な幻想を反映したオリエンタリズムを拒絶するはずのメルヴィルが、あえてステレオタイプのアジアのイメージを饒舌に語る瞬間があることに着目し、メルヴィルのドメスティシティとの複雑な関係性を探ることである。

『レッドバーン』『ホワイト・ジャケット』『白鯨』といった作品で、家庭も女性も徹底して排除したメルヴィルは、一般的にアンチ・ドメスティックな作家とされているが、文明世界の孤児イシュメイルが「野蛮人」クィークエグとの「新婚の床」に一種の「家庭」を見出したように、南島・極東にこそメルヴィルの潜在的な「家庭への衝動」が織り込まれているように思えるのである。三つ目は、従来は浅すぎて学術の対象になりにくいと考えられてきたメルヴィルの仏教及び儒教の理解を再考することである。特に、『白鯨』以降の後期の作品においては、メルヴィルのキリスト教的価値観に対する懐疑は深まる一方で、『クラレル』をはじめ晩年の韻文作品では、たびたび東洋の宗教が持ち出されキリスト教批判に一役買っている。『タイピー』や『オムー』で南島原住民の無垢を奪う宣教

師の横暴と墮落を糾弾したメルヴィルにとって、後期の作品では、東洋の思想こそ何らかの救済または希望または更なる絶望をもたらすものであったのではないか。

3. 研究の方法

(1) 長期休暇を利用してアメリカの大学図書館においてオリエンタリズムに関する古い文献を収集した。2008年にはハーバード大学附属図書館、UCLA及びUCリバーサイド附属図書館、2009、2010年にはUCLA及びUCリバーサイドの附属図書館において文献収集を行い、19世紀初頭から南北戦争後までのアメリカにおける極東及び南島に関する言及のある文献（書籍及び雑誌記事）を分類整理した。

(2) コーネル大学及びミシガン大学によるMaking of Americaなどの19世紀の文献を集めたウェブサイトにより、Atlantic Monthly, Harper's New Monthly Magazine, Putnam's Monthlyなどの雑誌記事の検索を行い、極東・南島に関する文献を集めて読み、テーマによる分類を行った。

(3) メルヴィルの全作品を再読し、極東及び南島への言及、オリエンタリズムのテーマにかかわる部分を比喩的なものも含め見つけ出し、分類してリストを作り、(1),(2)の文献からわかる同時代のアメリカのオリエンタリズムと比較検討した。

(4) 日本アメリカ文学会、アメリカ文学会東京支部、日本英文学会、メルヴィル国際学会、メルヴィル研究会等の学会に積極的に参加し、研究発表を行うと同時に他大学の研究者から貴重な助言を得た。

(5) (1)～(4)の成果を、研究発表、学術論文及び共著として発表した。

4. 研究成果

メルヴィルのオリエンタリズムの最大の特徴である、西洋が東洋に対して持つ負のイメージがいつのまにか反転して西洋の現実となることへの意識は、同時代のアメリカのオリエンタリズムと一線を画していた点であるが、このようなメルヴィルの冷徹な歴史認識は東洋の栄枯盛衰をアメリカ資本主義の栄枯盛衰になぞらえたことにもあらわれている。『レッドバーン』において明らかになったメルヴィルの伝記というジャンルの慣習への関心（学会発表③）をさらに深化させ、学会発表②及び図書①において、メルヴィルの短編小説「バートルビー」が当時国家的アイデンティティを決めるほどの力を持っていた伝記というジャンルを意識的に用いることにより、近代資本主義、西洋的合理主義への抵抗を標榜していることを論じ、ウォール街をレヴァント地方でかつて栄華を誇ったペトラに喩えていることからメルヴ

ィルの資本主義批判におけるオリエンタリズムの影響を指摘した。

19世紀前半のアメリカにおける西漸運動は一旦アメリカ大陸西岸にたどりつくとその植民地主義の対象を太平洋を越えてアジアへ、また南進して南アメリカへと拡張していったが、メルヴィルはそのような歴史の動きを特に「明白な運命」のレトリックに着目していくつかの作品に盛り込んでいる。論文③では、南米チリ沖の難破した奴隷船を舞台にして、アフリカ（奴隷）を支配下に置こうとするヨーロッパ（スペイン）とアメリカのせめぎ合いと人種に基づくアイデンティティの不確かさを論じた。論文①では、架空の南島（群島）を舞台にした *Mardi* において、19世紀半ばのアメリカがその領土拡張主義を正当化するために用いた「明白な運命」のレトリックが北米から南米へ、さらには中国や日本といった極東にまで拡大解釈されるさまを読みとった。

メルヴィルの極東及び南島への関心を探求するうちに、アジアおよび南島と北アフリカを結び付ける新たな視点が浮かび上がってきた。学会発表①においては、“The Encantadas”の第8スケッチ“Norfolk Isle and the Chola Widow”に登場するガラパゴス諸島の無人島の一つであるノーフォーク島に一人取り残され生き延びた混血の寡婦ウニーヤの原型を、『テンペスト』の台詞の中にのみ登場するキャリバン之母で船員の娼婦と言われるアルジェ出身のシコラックスに見出した。また、2011年6月にローマで行われるMelville and Rome国際学会において、“A Possibility of ‘Turning Turk’: Typee and Barbary Captivity Narratives”と題し、*Typee*に見られるバーバリー捕囚体験記（北アフリカでイスラム国家又は海賊に捕えられた白人の奴隷体験記）の影響を、特にキリスト教徒が異教に改宗する可能性とその回収の告白を巡るレトリックに着目しながら論じる予定である。

本研究を通じてメルヴィルと極東・南島を対象としたオリエンタリズムを考えていくうちに、特に近年のアメリカとイスラム諸国のテロリズムとの終わりの見えない対立を重ねてみると、建国当初からのアメリカによるイスラム理解（誤解）がメルヴィルのオリエンタリズムにも深くかかわっていることに改めて気付かされる。平和を意味する「サラーム」を語源とするはずのイスラムが、西欧諸国によるイスラム地域の一面的な理解、すなわちイスラム諸国ではどこでもイスラムの統一的掟が適用され同質の文化や社会が形成されているという浅薄な意識により、平和どころかさらなるテロリズムを生み出しているということを追究することなく19世紀のオリエンタリズムを論じることはで

きないことに改めて思い当った。より深く多面的なムスリム文化の理解に基づいてメルヴィルのオリエンタリズムを再検討するのが今後の課題となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 斎木郁乃、メルヴィルのヤング・アメリカ『マーディ』における「明白な運命」のレトリック、英學論考、査読無、39巻、2010、57-69
- ② 斎木郁乃、Mimicking Black, Fashioning White: The Spectacular of Slavery in “Benito Cereno”、英學論考、査読無、37巻、2008、3-13

〔学会発表〕(計3件)

- ① 斎木郁乃、Hunilla は Sycorax か—“The Encantadas” に描かれる「明白な運命」、日本アメリカ文学会東京支部、2010、慶應大学(東京)
- ② 斎木郁乃、伝記として読む “Bartleby, the Scribner”、日本英文学会第81回全国大会シンポジウム、2009、東京大学(東京)
- ③ 斎木郁乃、『レッドバーン』における若きメルヴィルの創造、日本アメリカ文学会東京支部、2009、慶應大学(東京)

〔図書〕(計1件)

- ① 牧野有通編、*Melville and the Wall of the Modern Age*、南雲堂、2010、Chapter 5: “Bartleby, the Scribner”: The Politics of Biography and the Future of Capitalism”、77-96

6. 研究組織

(1)研究代表者

斎木 郁乃 (SAIKI IKUNO)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：90294355